

博士学位論文審査報告書

大学名 早稲田大学
 研究科名 人間科学研究科
 申請者氏名 伊藤 大輔
 学位の種類 博士(人間科学)

論文題目 ト라우マの致死性の有無に着目した外傷後ストレス様症状の認知行動モデル
 A Cognitive-Behavioral-Model for Posttraumatic Stress Disorder-like Symptoms
 following Traumatic Event with or without Experiences of Threatened Death

論文審査員 主査 早稲田大学教授 鈴木 伸一 博士(人間科学)(早稲田大学)
 副査 早稲田大学教授 根建 金男 博士(人間科学)(早稲田大学)
 副査 早稲田大学教授 嶋田 洋徳 博士(人間科学)(早稲田大学)
 副査 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所部長
 金 吉晴 医学博士 (京都大学)

本研究は、非致死性トラウマがトラウマ様症状に及ぼす影響について検討を行うとともに、非致死性トラウマ経験者の外傷後ストレス様症状について、症状の形成と維持に関わる諸要因の影響性を明らかにするものである。まず、本論文の概要を紹介し、次にその評価について審査結果を報告する。

第1章では、トラウマや外傷後ストレス症状に関する国内外の基礎研究や臨床研究が展望され、以下の2点が問題点として整理された。すなわち、(1)「生命の危険性を持たないものの、経験当時と同様の苦痛をもたらす出来事」である非致死性トラウマが、トラウマ様症状にどのような影響を及ぼすかが明らかでない、(2)非致死性トラウマによって重度の外傷後ストレス様症状が生じる背景にはどのような要因が関与しているのかが明らかにされておらず、トラウマ様症状の表出に至るまでのプロセスが不明である、という点であった。非致死性トラウマによって重度の外傷後ストレス様症状を持つ者の実態や病態については不明な点が多く、これらのことを解決すべく本研究が実施された。

第2章においては、問題点(1)を解決するために、非致死性トラウマが外傷後ストレス様症状および生活支障度に及ぼす影響を検討した。その結果、研究1では、非致死性トラウマによっても重度の外傷後ストレス様症状が生じることが確認された。そして、研究2では、非致死性トラウマによって生じた外傷後ストレス様症状の重症化に伴って、生活支障度も悪化することが示された。さらに、重度の外傷後ストレス様症状を有する者は、人間関係などの特定の領域においては中等度の

機能障害が生じている可能性が示唆された。

第3章～第5章では、問題点(2)を解決するために、認知行動理論に基づき、非致死性トラウマによって重度の外傷後ストレス様症状が生じる背景にある要因やその影響のプロセスについて、致死性トラウマ経験者との比較から検討を行った。第3章では、認知的要因と外傷後ストレス様症状の関連について検討を行った。その結果、研究3において、非致死性トラウマでは、Posttraumatic Cognition Inventory (PTCI)の「自己に対する否定的認知」、「世界に対する否定的認知」と外傷後ストレス様症状に比較的弱い正の相関がみられたものの、「トラウマに関する自責の念」に相関はみられなかった。一方、致死性トラウマにおいては、「自己に対する否定的認知」、「世界に対する否定的認知」、「トラウマに関する自責の念」と外傷後ストレス様症状に比較的強い正の相関を示した。次に、研究4では、外傷後ストレス様症状に対する否定的解釈を測定する尺度(Negative Appraisal for PTSD: NAP: 2因子構造: “症状の表出や維持に関わる自己の否定的解釈”, “症状の否定的予測と意味づけ”)の作成が行われ、信頼性と妥当性を有することが確認された。そして、NAPと外傷後ストレス様症状との関連を検討した結果、非致死性トラウマと致死性トラウマ経験者の両者に共通して、NAPの2つの因子が外傷後ストレス様症状と高い正の相関を示した。

さらに第4章では、行動的要因と外傷後ストレス様症状との関連について検討を行った。具体的には、研究5において、トラウマや外傷後ストレス様症状に対するコーピングと、外傷後ストレス様症状との関連を検討した結果、非致死性トラウマと致死性トラウマ経験者の両者に共通して、「回避的思考」、「放棄・あきらめ」といった認知的回避コーピングが外傷後ストレス様症状と中程度の正の相関を示した。

そして第5章では、第3章～第4章で明らかにされた認知行動的要因が、外傷後ストレス様症状および生活支障度にどのような影響を及ぼすかについてプロセスの検討を行った。その結果、非致死性トラウマ経験者においては、NAPの「症状の表出や維持に関わる自己の否定的解釈」や「症状に対する否定的予測や意味づけ」、PTCIの「自己に対する否定的認知」や「世界に対する否定的認知」が、「回避的思考」や「放棄・あきらめ」といった認知的回避コーピングの実行を介し、「外傷後ストレス様症状」に悪影響を及ぼすことで、最終的に「生活支障度」が悪化することが示された。また、外傷後ストレス様症状に対する否定的解釈は、外傷後ストレス様症状に直接的に悪影響を及ぼすことから、NAPで測定される認知的要因に対する介入が有効である可能性が示唆された。一方、致死性トラウマ経験者においては、非致死性トラウマ経験者と比較すると、PTCIの「自己に対する否定的認知」、「世界に対する否定的認知」が認知的回避コーピングの1つである「回避的思考」や「外傷後ストレス様症状」に及ぼす影響が大きかった。また、PTCIの「トラウマに関する自責の念」が、「回避的思考」の実行を介し、「外傷後ストレス様症状」に悪影響を及ぼすことが示された。

最後に第6章においては、本研究から得られた成果を整理し、非致死性トラウマ経験者の臨床心理学的アセスメントの重要性を指摘するとともに、非致死性トラウマ経験者に有効と考えられる認知行動的アプローチを考察した。

以上のように本論文は、非致死性トラウマ経験者の諸症状の特徴と生活支障度の高さを明らかにし、その臨床的介入の必要性を示唆した研究である。これらの対象者は、現在、世界で広く用いられている精神疾患の診断基準であるアメリカ精神医学会による基準（DSM-IV-TR）においては診断がつかない一群であり、それら一群の臨床的問題を系統的に研究し、かつ臨床的介入を行う際のターゲットとその方略を示唆した点は評価に値する。また、受診歴のない成人の中にも、明らかな外傷後ストレス様症状を呈する一群が存在することを示した点は、予防的見地からも有益な示唆を与えた研究であるといえる。今後、研究で得られた知見を大規模臨床研究等で検証していく課題は残されるが、臨床的意義のある優れた研究であると判断できる。

なお、本論文の一部が掲載された主な学術論文は以下の通りである

【1】伊藤大輔・鈴木伸一 2009 ト라우マ経験の致死性の有無が外傷後ストレス反応および外傷経験後の認知に及ぼす影響。 行動療法研究, 35, 13-22

【2】伊藤大輔・兼子唯・小関俊祐・清水悠・中澤佳奈子・田上明日香・大月友・鈴木伸一 2010 外傷後ストレス障害に対する認知行動療法の効果：メタ分析を用いた検証。 行動療法研究 36, 119-129

以上の結果から、本審査委員会は、伊藤大輔氏の博士学位申請論文「トラウマ致死性の有無に着目した外傷後ストレス様症状の認知行動モデル」は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上